

巻

風 飾

柳 多 留

田

星 天 編

1147  
44





門へ9特  
別 1147  
巻 44



彦子麴町の井戸も  
いなるいふかまのしごと  
を座の邊をよぶるい  
前白は清格をとり  
を井戸有る町を  
月とくさあはとあ



くまのこらわしる白く  
にびるさしよてらめごと  
つきぬ敷の柳多々  
字五ノ筆ト菅草  
筆正柄抄のかりり子

辰仲秋

芋洗評

聖書(白)けく鳳凰のまじり  
若さの冠けちりんかむうす  
赤肩衣使老目縁く法よ坊  
指梳く玉と圓ととぬひ合を  
袂ハ敷古物と後と目よさじ  
うらうらゝい鬼う生木の枝とまき  
板の借正腰やト白ひ合と  
まんだね(お)骨の死ぶ写と園

花道  
計人  
カテウ  
三ノ夕  
尾合  
鳳凰  
赤弱  
井城



山林をさがしつゝつてくる西の猪  
赤根の海苔とさきすゝめ  
大正と市子後の町とく  
大それた心おのれを  
まんぢんのあんなおれ  
さかしのふまれは角を  
化されよう柄のふい  
舟を流されと  
時よ半流

其流  
集馬  
二町  
榎水  
計人  
里  
尾合  
本  
赤  
折半

ついでと失せり  
物のおお赤の  
とらと  
ゆんの  
引窓の車も  
換おの  
さき  
まみ  
火の

松山  
井  
村夕  
赤  
柳林  
可笑  
玉川  
山  
比内



ちんちんくちのまの口をぶぼ世し  
かろうこの名もく子依れ係毎  
伯母と叔母の目をねま暗いつがえ  
雲のそとあまう付く影をうり  
あつこゆう不二見のち物いすの聲  
如もすめ男を音あごこくえん  
りあるくら輝のこねうあつち  
川書いそくあびかざるふ人ト後  
きんらんをわびうつげらふ人信

山嶺  
五坂  
権松  
海音  
柳西  
尾合  
カテウ  
赤糸  
妻波

抑軍テニ

とめ

又育るとらんぐねふまあな代  
あまをこくくくも葉屋のよおまは  
ゆねの声わくこのはてとあまはす  
さねてんいお依をみんなあつこま  
つらんでる答をとりたせつらうき  
抱く子や何うぞくまもいおんおす  
而う青ひまこぶらうをいんあ明々  
節と金糸を泣くくもあつち  
あつちと先母よえせらぬの礼

二町  
木契  
生薬  
中麦  
三物  
尾合  
山嶺  
五坂  
某子



旗の巻も海城たう入以てり  
きんたまごつるまひてくる酒のまら  
以神の急の脊中くたきし  
之方をいひすこせ方の杖又也  
さくら(の)いらはやつて一松とぞ  
至代ハ麒麟女帝よ大への

一徳  
一徳  
山積  
二枝  
十丸  
九著

抗声評

棠ちらす園よりくくる皮いほ  
花園ハハを解く以て其の詩

一徳  
一の巻

舟車可也

文ハ加茂武ハ七代ノ末とて言  
おハ歌也物と振と目とさし  
山吹の色ハ実乃荷るは和代  
又有るところんご候はは和代  
小令わく大をよぬる名もあ  
遠洋令別出ぬのちりけき  
追くよとらぬものある也の離  
美より猪くまけしつぐ大あり  
新田のそそ貞どのとせむあのみ

海  
尾合  
青露  
二町  
赤糸  
山  
若媛  
桃林  
全



大よりも様よとつゝ利口く  
 ちんぷく(のまの口をらば速し)  
 柳(このまをく)子供の像雨  
 大の(これそさ)白むく熊月  
 水國の雲よ大乃(とわ計け)  
 ま美くみくをすれとの法仁を  
 見え勢(は)をぬ麻(や)のあ(きん)  
 糸遠(ふ)ま(ひ)ん(の)角田川  
 丸海(一)石(二)の(山)や(さ)る(く)き

柳甲(二)正

糸のそれぬ回と女とたてきり  
 糸(終)を返(礼)者(を)た(た)く(し)  
 糸(の)中(務)を(を)あ(方)の(ま)を(り)  
 形(造)八(人)又(未)信(よ)度(く)上(り)  
 ち(修)ぶ(く)を(精)の(皮)を(て)う(ま)き  
 若(これ)打(夜)の(飛)上(留)る(忌)  
 活(氏)方(湯)の(返)報(を)あ(て)か(ち)  
 上(能)て(も)夫(ウ)の(あ)ら(此)七(を)坊  
 天(人)が(世)る(ぐ)み(う)ん(の)お(が)り

碎(以)  
 糸(二)  
 玉(川)  
 八(全)数  
 西(光)  
 井(蛙)  
 妻(弱)  
 杯(舟)  
 猪(松)



坂斗りやいしうまのよぬこまり  
 おいしんの目お度影へ売法キ  
 福をぬ肉ハ辰申へ手を合セ  
 福むぐぬ先ハ松の二もあん  
 麦飯と跡じくくふ有むさ  
 女房うあすあてさきまぐさや  
 雷も鳴らうつふさねる市二日  
 う〜店の火子耳も口もあけ  
 あんこ〜のうさけまそく入料理人  
 尾合  
 二粒  
 可資  
 猪松  
 メ子  
 東来  
 志丸  
 村夕  
 東来  
 井屋五

孫清うのあげくへんの事きれ  
 けいせんがなまきりうまき市丁町  
 しろの尾垣松と塙をつくまはき  
 劫富の息子と〜く〜あとおび  
 玉島老来と〜く〜まきび〜と  
 陸地と〜楽舟と〜あ〜知〜ひ  
 化粧と〜だつきけ〜と〜い初〜メ  
 にかう〜と〜を〜目〜あ〜ら〜お〜子〜愛  
 念〜と〜う〜お〜茶〜と〜縁〜の〜有〜と〜て〜も  
 松山  
 市東  
 東来  
 玉川  
 木葉  
 木葉  
 如不  
 眉長  
 如菴



ちよきごの子とんくこえはれ  
五つやの棒と依をつつくや  
山伏く度くあさりる深成方  
井志の帰る目まへまうらへん  
糸入を隣の子封を切り  
手忘れぬとと隣してあはる  
山伏も思こまれかげまらんきよん  
店中の尻く大敵ハ勝をつき  
おしるの毒ハ踏さる面ラハ芋

松山  
梅香  
二町  
集る  
港指  
市東  
カラス  
猿松  
木契  
柳屋云

とわ

彩る世の門とあ入るれもあま  
梢子とあはくくハハハ男  
書ゆのすのすのすのすのす  
アしつとゆのすのすのすのす  
ぞうまんよ尻のぬれをどうむき  
お兼よあつるあつるあつる  
まきよ小関よ江戸の清谷急  
物鮮直も猿猴ハよとのをい

川柳評

雨夕  
千花  
眉長  
古香  
山猴  
猿松  
善山  
春約



甘菜の衣奉加ハ琴比才子  
 目よ飾り耳小ハ藏法師  
 不二ノナユセト入れも奈ま  
 子羊指春日新津よりふゆ果  
 雪也娘雲のびんづりまの机  
 井手南境あれと隠れく切火せ  
 猪牙舟ハ海サのぬれぬ機をのり  
 新辰ハハ歎成ねしひあくく  
 ひんを信若掃まの巻を巖され

門柳 山 生 花 洗 笑 楽 光 松

新辰ハハ

お奇ハ蓮のちつものハ梅をうり  
 海つ舟をかく大肉ハどきうく  
 武をすそく西けりのも清とて  
 清の声流の果とあまれす  
 音も鳴りつてさける市二日  
 之とらでトタハハおぬ城埃老  
 去んうりを女房ふさせく年終り  
 仙洞つまら清奇の役子足  
 将たつまらとくあんとるの礼を参

本若 カテウ 本丸 老翁 志丸 奉虫 市風 亦乐 斗丸

とら



仏神を其の脊中くたき(山)  
 やげばこい小田系あまの汗(肩)  
 少のここの大う神とおま(里)  
 さとやんるのまき(白)  
 ちよえても祝ちとる(十)  
 清の系とま岩ハれ(十六)  
 若神の肉くど(練)  
 旅のちちどくた(一)  
 と神やぶよ(全)

折世三十八

二祝ハす神と(亦)  
 立の玉肩や(八)  
 げぞあめと(井)  
 清世ま(名)  
 さぼてん(小)  
 二成ハ肩(東)  
 さき(山)  
 おくの(集)  
 こん(肩)



意の意門に某くはひまうり  
 親よりも某を志くハ辰の島子  
 いぬやう世系の色をば友なりで  
 捨料をきくゝゑさうハそれ勇り  
 是がみな今なきとて十首  
 ちくちやうとえれる程なき  
 日影町うらつくやうとせうつは  
 勅旨の島子とてくゝとあび  
 活と實屍を切らるゝに云え世  
 柳里三九

子  
 市東  
 其係  
 志素  
 立友  
 友後  
 千花  
 一徳  
 柳里

南向きのぬ親又此控変  
 湯でもう一版でもよとかり人  
 生この勤下女業籠りと吹くつ  
 たはいのぬけぐゝ奴一本はし  
 月をいふう妻よむる大ニ中日  
 白よかり又梓うまのかく世中  
 大ハハ又附や格くるる素と為り  
 うぬが世房とせつてるたうけ共  
 親分の主婦よおんぶだつとす

西光  
 木系  
 市ヶ谷  
 東来  
 蛇内  
 立油  
 伊庭  
 友後  
 山積







昔よりしるしありきも園をさへく  
 本年中にまきまき後とてなすり  
 八つ目ヨリヤウの飯まぐ目の茶  
 茶子ある以ハハ中も志山橋  
 奇よいしくいのおうあむえ  
 世冠糸よさせくがわさまん  
 ちぢよ上げくあ子と又連へる  
 みごころあきほはあひの皮  
 又いへいよいよいあやあえ

計人  
 王彦  
 若松  
 丑友  
 尾合  
 二町  
 鬼柳  
 二町  
 松山

ちぢよ河とてをほさづけ  
 下能くすに沈とふみのだじ  
 臨しとて共うで契情の髪あひ  
 ちぢよの清くあやあきあひ  
 由法也の柳よあき乃海日星  
 骨城のようむさる花のあ  
 正のやまの穢よあひもあきあ  
 日照及海の社のきよのし

北内  
 古香  
 二ツト  
 七城  
 集香  
 香貞  
 了也  
 里彦  
 本美



繼母も存ねりて年暮や並ちり  
有る人の事始の初で幸見露  
其他の玉も後りる此非号  
けづりりも寄葉なれこそぞきた地  
車坂もをつらぬと能出たり  
叶ててもとけのいそれぬ形見  
只をいかに清い百足の文を中り  
弟二のまへも言ふ裾地の時香  
あつちや枝よすしつら小敷こも

地因 志水 一姓 数人 素虫 空虫 千夜 鱗 柘林

おまにあらを鹿より年するなり  
あがる洗ひぬ代のおまに  
おまにをんがして於とらまを  
人の子を於んが言よ酒をう  
清さねのまを時づ踏の所  
おまにうのさあろ見ればおま  
洞法を扱で於てをの女房と  
ま白なまを赤い人づらみ  
初平の日かす踏れぬ形見

碎所 藤平 門柳 海老 猪松 雪成 数人 養才 香貞



二千年の百社子あり  
 如きうよ月とていつそ娘の礼  
 物平よてんでよ二本おとりの  
 笑しきさ帯をとりぎ色えん  
 湯でかふるを丈夫にみとけ  
 て熱のうほしこのを帰らけ  
 かけるとと語つと語つては  
 筆のまじりては月長ををらる  
 雲をよまると月長の里しり

有幸  
 里花  
 五友  
 里梅  
 柳香  
 東香  
 東雅  
 の花

ち後と子の例とあまねく  
 氏子よは宮乃指前を指くま

ソ子  
 カテウ

批評

未のまんはよとくく氏子よ  
 有難きと立社とみ熱とせしめ  
 春秋を二つと新よ未神号  
 あ歌でハるひ唯一部トまき  
 指が舞其そくを梅のたれ花  
 を地へつけお作のあつてん

西旦  
 鴻香  
 梅雨  
 石能  
 流  
 花



江戸見坂子社一目よ午あや  
 せん志やうさを教のきく果は  
 正二位坂のうら遠教とわ  
 農民のわりテス稲を法荷イ  
 沖号も花表のふよハけいん  
 少果後波よも岳のあづい  
 天晴と戸隠れ非差らねる  
 かんを盾をさしあうのちを  
 母弟若うさうしくえれは一也

全  
 杯  
 再  
 一  
 カ  
 メ  
 松  
 柳  
 意

化まわらるる息子のあやとわやん  
 このしんが鯛よらるのとは縁日  
 物年が有るぐははら若よのせ  
 狗くくのやうな種いつうまねる  
 あくくあうもあうダトたいてる  
 下戸のよ乳河鮫川よあはる  
 みごらわく事述がある巾の皮  
 お茶ハ意船こつぐあるのを  
 女房よ事とメささせ下女をメ

里  
 鱈  
 古  
 餅  
 尾  
 丸  
 二  
 山  
 尾



丁卯  
に  
は

江戸見坂子社一目よ午みあり  
をんぢやうとさき教の言ふ果ては  
正一位坂のうへ述教とせし  
農氏のわりテス物を法荷イ  
沖号よ花表のふまひけしん  
少あ後波よも岳のめぐりしん  
土崎と戸隠け沖号らねる  
かんな層をさしふぐのちをん  
母市若とさしんてんは二相

全  
杯  
あ  
の  
笑  
カ  
メ  
子  
松  
山  
柳  
由  
き  
柴

化まわつるき子のあやとあやん  
このしんが朝よけるのもは縁日  
物年が有るぐははら者よのせ  
物くくのやうな體いつまねる  
あしこけしんがダトたいてる  
下戸のまねりけりよあはる  
みごころのきき述がある巾の皮  
おまの意船こつぐあるのを  
お房よ事とメさせ下女をメ

里  
松  
鎌  
台  
餅  
尾  
合  
丸  
二  
町  
山  
柳  
尾  
合



新口や汐も布が五六尺 二町

亭々評

一社あゝ一穀了を法も漢  
 阿まやうくも飛鳥い落る  
 神あのを雪よ梅ちう法あり  
 不拍子も神あよ叶ふ法系礼  
 初夜あつと云きキえはぢり  
 ちも也も花のともやうなれ是  
 集ううたいてりきる娘うき

精松  
 松山  
 市東  
 可笑  
 東嶽  
 若松  
 赤良



化さぬて方うらう是尾をんせら  
 尻実新の鳴子よりよまきなり  
 小くしう形うよとてる梅あ山  
 二まよ二度あうもやをそるが  
 雪を屋と男や痛くあて物落り  
 十七里四方の母とをう法うせ  
 人の子をたのんごき酒をわ  
 下銀くまじし鏡をみみのを  
 みおけうう筆をうらう竹の皮

山猿  
 蛇肉  
 花屋  
 山猿  
 如雀  
 苗人  
 海鳥  
 古鳥  
 二町



息子新の年歳を述ぶらけ  
 此内  
 了つときの産をを物神楽堂  
 如花  
 琴を志くぬと申くぬれぬ  
 素直  
 けよてもよけのつれぬ  
 八重枝  
 かしらよのやうよ日陰の雪いとし  
 東来  
 能因が形をえこむりさり雨  
 雲来  
 ぬくまぬと云と添ぐ  
 榎松  
 ぬのぬきもふ通ふでい指と打ち  
 東来  
 目の入る目くもまを海と  
 木来

人の子成れんぐさほを  
 綿鳥  
 ちと謎かけなる清室前  
 一垣  
 白蓮よ白双ありがと神楽堂  
 美物  
 伝の門よ恋舞鬼はらんこ帝キ  
 志夕  
 初年の日から踏ねぬ  
 香貞  
 玉川の流れ川中浮き沈も  
 杯舟  
 初年よ七子ぬのあまこり付キ  
 五友  
 るの足阿字よせしとてさうが  
 如花  
 大一人お針とぬきゆすけてやり  
 可花



木の目をうつく達々の目入る  
 木葉  
 枯枝よ海苔と笑ゆる神が浦  
 志又  
 中津の狭がうらひとそよぶ人  
 全  
 日くれぬをくち事定てかけ  
 亦木  
 系折の海に米を沙降  
 古香  
 糸をまゝの畝度廿八五丁なり  
 桃林  
 実のまゝぬまゝ実の方迄も  
 以人  
 山吹の糸物まゝなまゝなり  
 著更  
 秋の田を折丸以乃沙降  
 葉虫

糸の目麻とひつド乃ぬれ始メ  
 桃林  
 まゝなんどかつりより六職のほ  
 如花  
 まあ何よ何くらぞとくくまき  
 尾合  
 扱けちな戸ごとやうぬら釘  
 松山  
 年の日ハ正月とト下女たひ  
 又子  
 此を神をこつよつけくは味方  
 不能  
 ちろんくと五多切りのそばチ奏  
 著更  
 お糸をまゝすう面うがさるい也  
 尾合  
 虫畑の目まゝあやしくあふ本  
 不能



福むくのやうにむらびる二人、持拍  
 ぶらぶらとしまのむらぶら声  
 ちかくちまきんあそびをたあげら  
 のろいずよむらびるむらぶら  
 あうんのたまぐらう十二二をら  
 被中の被あそびのむらぶら  
 ちまきんよむのむらぶら  
 やらほやすくちまきんむらぶら  
 佐分のむらび悪魔いんと啼き

柳を  
 東横  
 碎作  
 著史  
 射夕  
 系乃  
 尾合  
 志夕

乙葉の小派治稀代のむらぶら  
 合植のむらぶら  
 首の系ハおくむらぶら  
 松子ぶくどんともむらぶら  
 我たまがむらぶら  
 雪又痛くむらぶら  
 島子歌むらぶら  
 ぬれむらぶら  
 目の入くむらぶら

有幸  
 井植  
 乙枝  
 柳雨  
 亦楽  
 其誠  
 比内  
 可笑  
 小葉



宵にの上より向す入る花は雨 雨旦  
 牛の角文字を牛の目く是 春福  
 一子を舟目でくくはり 男 書貞  
 ざつてい捨るハ物ノ座の芽 馬文  
 洗髪はよたを種を種を子 柳香  
 希ふよる我でい鬼がまま 二町  
 鬼の玉でもかけえよせあらぬ 夏守  
 作西きぬ集り場のもろくん 一地  
 おくくくくくくくくくくくく 夕子

柳屋

十戸の通礼河勢川よぬらねる 九鈴  
 唯候のお節村をりゆりたき 清香  
 中藏くくくくくくくくくく 十夫  
 ざつてい捨るハ物ノ座の芽 雨夕  
 てる程よせりくくくく赤く 汀人  
 洞法ももむぐ邪字をハ世を 五人  
 目如どのいよとお澤よとてお神 掛水  
 卒のあしいよのき目やう所 木雅  
 けだ天より生民を下女が後 亦示



人馬の未踏ハ土乃だんごたり  
 志直のくまのぶらりこれれはあり  
 志直のくまのぶらりこれれはあり  
 本口く斗うたうふ有がうさ  
 多摩子のあうり吹消ス申風  
 ちれじくちくと梅の風をきり  
 するの足けまよふまよふとがり  
 浪平の月んせのふれが志直あり  
 業平を逃あのみ水と逆らりりり  
 柳音  
 矢正  
 五河  
 兼中  
 集音  
 門寿  
 如花  
 鬼押  
 浪音

志直評

如くくぶく為進る氏の進こ之  
 志直のまゝ志直の要 石  
 志直が世ハ地もゆらぐせね要石  
 一声よ雀も小松の未踏柳  
 志直の松の小なり志直の志直  
 志直の百足に正の脊を渡り  
 志直の迷ぐか志直を白よりけ  
 志直の火で下志直の足らハ志直  
 マイタ  
 山橋  
 計人  
 市風  
 志直  
 山橋  
 志直  
 青志



山ナ米で大キナ<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>わ<sup>ナ</sup>り  
 子<sup>ナ</sup>こんで来るハ<sup>ナ</sup>奴<sup>ナ</sup>ナ<sup>ナ</sup>婦<sup>ナ</sup>人<sup>ナ</sup>  
 産<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>市<sup>ナ</sup>場<sup>ナ</sup>亦<sup>ナ</sup>子<sup>ナ</sup>毎<sup>ナ</sup>有<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>り<sup>ナ</sup>い<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>  
 奉<sup>ナ</sup>れ<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>調<sup>ナ</sup>合<sup>ナ</sup>を<sup>ナ</sup>下<sup>ナ</sup>老<sup>ナ</sup>え<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>  
 系<sup>ナ</sup>候<sup>ナ</sup>な<sup>ナ</sup>花<sup>ナ</sup>ハ<sup>ナ</sup>畠<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>もの<sup>ナ</sup>が<sup>ナ</sup>り<sup>ナ</sup>  
 ニ<sup>ナ</sup>テ<sup>ナ</sup>村<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>他<sup>ナ</sup>ハ<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>さ<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>直<sup>ナ</sup>が<sup>ナ</sup>上<sup>ナ</sup>り<sup>ナ</sup>  
 生<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>ま<sup>ナ</sup>た<sup>ナ</sup>い<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>原<sup>ナ</sup>を<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>み<sup>ナ</sup>付<sup>ナ</sup>  
 目<sup>ナ</sup>が<sup>ナ</sup>ム<sup>ナ</sup>ー<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>人<sup>ナ</sup>形<sup>ナ</sup>手<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>鳴<sup>ナ</sup>可<sup>ナ</sup>へ<sup>ナ</sup>う<sup>ナ</sup>れ<sup>ナ</sup>  
 二十日<sup>ナ</sup>子<sup>ナ</sup>二<sup>ナ</sup>日<sup>ナ</sup>セ<sup>ナ</sup>ハ<sup>ナ</sup>り<sup>ナ</sup>ない<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ん<sup>ナ</sup>日<sup>ナ</sup>  
 計人  
市草  
松山  
蛇肉  
マ<sup>ナ</sup>イ<sup>ナ</sup>又<sup>ナ</sup>  
赤<sup>ナ</sup>馬<sup>ナ</sup>  
尾<sup>ナ</sup>合<sup>ナ</sup>  
亦<sup>ナ</sup>示<sup>ナ</sup>  
井<sup>ナ</sup>俵<sup>ナ</sup>

へ<sup>ナ</sup>ハ<sup>ナ</sup>立<sup>ナ</sup>テ<sup>ナ</sup>た<sup>ナ</sup>て<sup>ナ</sup>ハ<sup>ナ</sup>何<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>奴<sup>ナ</sup>ぞ<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>  
 梅<sup>ナ</sup>く<sup>ナ</sup>つ<sup>ナ</sup>ハ<sup>ナ</sup>井<sup>ナ</sup>子<sup>ナ</sup>雀<sup>ナ</sup>ハ<sup>ナ</sup>三<sup>ナ</sup>梅<sup>ナ</sup>刺<sup>ナ</sup>  
 兵<sup>ナ</sup>老<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>文<sup>ナ</sup>り<sup>ナ</sup>が<sup>ナ</sup>ハ<sup>ナ</sup>斗<sup>ナ</sup>り<sup>ナ</sup>なり<sup>ナ</sup>  
 少<sup>ナ</sup>や<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>ま<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>身<sup>ナ</sup>繼<sup>ナ</sup>る<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>廣<sup>ナ</sup>く<sup>ナ</sup>幸<sup>ナ</sup>  
 淡<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>ま<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>こ<sup>ナ</sup>が<sup>ナ</sup>梅<sup>ナ</sup>よ<sup>ナ</sup>ん<sup>ナ</sup>で<sup>ナ</sup>存<sup>ナ</sup>る<sup>ナ</sup>  
 麻<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>他<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>さ<sup>ナ</sup>う<sup>ナ</sup>な<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>山<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>鳥<sup>ナ</sup>候<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>  
 入<sup>ナ</sup>舞<sup>ナ</sup>ハ<sup>ナ</sup>子<sup>ナ</sup>中<sup>ナ</sup>天<sup>ナ</sup>井<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>ん<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>い<sup>ナ</sup>へ<sup>ナ</sup>  
 託<sup>ナ</sup>主<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>望<sup>ナ</sup>小<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>へ<sup>ナ</sup>る<sup>ナ</sup>こ<sup>ナ</sup>め<sup>ナ</sup>で<sup>ナ</sup>成<sup>ナ</sup>り<sup>ナ</sup>  
 引<sup>ナ</sup>け<sup>ナ</sup>る<sup>ナ</sup>氣<sup>ナ</sup>ぐ<sup>ナ</sup>ぞ<sup>ナ</sup>う<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ん<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>お<sup>ナ</sup>り<sup>ナ</sup>  
 百<sup>ナ</sup>夕<sup>ナ</sup>  
 ト<sup>ナ</sup>九<sup>ナ</sup>  
 北<sup>ナ</sup>テ<sup>ナ</sup>洗<sup>ナ</sup>  
 カ<sup>ナ</sup>石<sup>ナ</sup>  
 有<sup>ナ</sup>幸<sup>ナ</sup>  
 柳<sup>ナ</sup>林<sup>ナ</sup>  
 宇<sup>ナ</sup>洗<sup>ナ</sup>  
 三<sup>ナ</sup>朝<sup>ナ</sup>  
 二<sup>ナ</sup>町<sup>ナ</sup>







千江をかくるねんかおあ始末 五橋

楓声評

家の大用新波津、浅香山  
ハッ橋で世を渡ッてるひんのま  
い仕音子形の席る子の笑  
和らけ風てか風よりひびし  
十哲のオチャで二橋たんにん  
母の無垢く雷門をぬけ  
たましいをまたいてえん精入  
全 杯母 本堂 折也

千江をかくるねんか

かねがおあまあめもく、京へえり  
空でなくたまされて咲、床の花  
下夕の戸で上んの戸あぶる山  
梅子み成る、八月の月の梅ノ香  
大長八重の下で死ぬ氣ん  
唱止で折目をたんの、音つお  
茶ユうま、八重クインヤ生 碎  
江戸味、噂とりの大名小路ん  
七里んへ武運つ、なまき、瑞澤ん  
里産 苔又 カサウ 南風 若雀 メ子 若美 井坪 矢正



かりくと笑ひ日本いつがもねへ  
 初まが候うはほごなくこのる  
 来れはえよりそやく縁をる  
 老な年友達たの遠がきし  
 出へんと泣やを云つてみそを付  
 海あてたはへ帰るは日なり  
 矢人近不仁なまね法代、怪  
 大名のえだーまなるも浮世ん  
 中で玉子くといふ声どよよび

青島 針人 志水 一佳 厚合 雨且 亦乐 全 香欠

卯三二五

妻飯ハ笑人をばハ内ちなり  
 秀ハハ帯をどかれ一三上山  
 くらびりのとびをなる内祐等  
 雷も清玉へひびく名不かり  
 江戸のる思を是所で人よ成り  
 縁あつむ内新去の手をかり  
 神をよめやどなく帯のまたと成  
 中うれいよなれハ平安も巨と  
 志ハるめ系ハ志やま十の明実

二町 岩精 里梅 榎井 山柳 幸藏 素虫 物産 志父



おつ五口でたぐを云五月五  
 夕時で川つらり風のこやげん  
 六時下七日の目をらんあめを  
 やつらまはゆの陰をふじ鞠子  
 とう海まふ二軒がけのき相町  
 世中のさいやつだともなる毛延寿  
 車井の粟ころちりんとあつち  
 伴のまがき流の宮へ二本あつち  
 足すの八島異を釣ハつては侍

卯巳二二九五

あまきるのいでいで春まをさし  
 ともといわはたでちやんがを念ひ  
 束竹とた竹のちまぶた中や  
 秋葉の背へうまいあを下の  
 仲糸の引れかろし一連後ん  
 花流の周る和田ハ豆をつけ  
 石をい手で又航柱を引かじし  
 三五で割れははを和尚より  
 ちくともめふなつてかみりこれ

尾倉 其誠 柙雨 東智 有幸 糸乃 其誠 与様 吉平



相の本を以てする以て婦人  
新道のをあるにほへん  
激戸物も見るあは声か  
五友  
長壽  
矢正

亭々評

法扇子の者不ぞおのりつた  
約下弦で織すは法道の箱鼓  
沃山を米で大ききをめぐり  
き方ハ仕合ものことあんざられ  
江戸東海道といふ大名小路  
木楽  
三枝  
角夕  
糸乃  
井坪

望斗り糸風のをうな月見なり  
れいのまのえんて人をあは有楽  
林玉のあらハ不子表裏在  
二代目があるたしつ子車路り  
強者の交りつたハ斗りなり  
蓋の花さうくねをつくまは  
かしまあく成るとお希の手つら  
病家見海子奴の志りをやり  
九朝月の隣でやつと貴て来  
柳島  
北雀  
高徳  
津島  
松山  
橋松  
八重山  
若夫  
メ子



山吹をよけく 峰一ツとり  
 やまの風を風ぞかき風よりいじ  
 塗挿子ををかかせる所地入  
 傘と米のるゝ 糧 なり  
 首と尾のつるのハ松も西白  
 多のふたないがかくすんたほい  
 蝶二ツ 意とほこれの中カを海に  
 田へけり橋へけりのもか守じ琴  
 かあ仔細がさ尾ふまきりいこい

新正六十七

梅子挽をこまき交て下たこまり  
 口をすく志て喜梅をたへやんを  
 つれく草の葉たといふ白うるり  
 二月下旬云々の流がえせを海  
 一板鳴々又帰よこしくは十六  
 いりくまいさくハ白てついつあそ  
 飛りいじうをさ帰るのもねるん  
 か因華へ口信がい志やへ梅高ん  
 家の大笑難波津子津香山

川柳  
 志夕  
 水産  
 里産  
 山柳  
 蛇内  
 山峯  
 山橋  
 柳雨



乙亥月終筆入よこねり 雨  
 てもごぶちやうのとねの縁をる  
 目かごうの人形ものちるやうへきり  
 舟の船めさひ斗りとり急なり  
 ありんやらるハねなむすめん  
 ちくづるをえいいせや汁をす  
 舟の楫拵てかえなり門をぬけ  
 だつがうのきり急毛丸尾なり  
 白酒のつとりハ急のえきへつけ

里花  
 中条  
 三粒  
 尾合  
 斗丸  
 松山  
 杯舟  
 世因  
 子

新平 廿八

雨且評

君悲子万民のうむ厚氷  
 川教子五ツとけ心の橋を掛け  
 波橋の及孝月の雲く喰ひ  
 釣鐘ハ喰ハ百ハるんの澄れ  
 おまひこしつでもあイ舟と石二  
 毎火のえへ源氏の魚がまり  
 日よハ夫婦別ある因表能  
 桐のそイ風風天く海テ唇  
 海島が異えの橋へつまゆり

本雙  
 橋松  
 朱柳  
 如雀  
 三枝  
 香欠  
 有車  
 杯舟  
 馬橋



五やどり他生の極をかりそけ  
十二ハ啼者ニ名ハ免味ん  
腕を流つこむハ流の儘ん  
於多子回あるはし海来り  
雲深の社を白猫すまきをり  
毛のいこねまふ一枚の首をかり  
腰帯ぐ紐へめんこむらうか  
サハいへど油やもをたてかぬる  
不二ひふくきすうらうか

古香  
橘松  
如雀  
枕月  
古鳥  
本葉  
カチ  
溪住  
里梅

所集一三

其くふふふと本そりつあまなり  
ながいきをすねバ短く杖こ成  
懺でも能くもふらハ三百工  
母かやのおづちあぢまにへる  
延寿林見唯むれも左又坊  
やうか子娘ハ姑の函がしす  
ふいらち子そんおの母わつて  
ハハね氣ぐえりや西燈ち如  
内手んころな中ぐ星一本  
夫ハ姑秋ハ志くこのまじじ

胡粉  
美松  
本葉  
志水  
蛇肉  
香堂  
志夕  
再夕  
采柳  
胡粉



去海の後ハ大づちばりてま  
 井の外ト望し之合程に不れ  
 えキがれは淡梅をしく香し  
 南々山ハ十丁ちふまあり  
 めざうすもといねへ横へ横  
 茶のみ女がまよ美流おろ  
 やまのまぢや南は之空の恵  
 えらま斗つてあんさうとく  
 身をまうはまをのつふ茶の  
 計人 黒松 溪院 蕙風 キヤイ 赤松 其笠 扇合 カ房

柳屋三ノ巻一

二階くまきり人おろしげんせ(使  
 今の巻もよひこ小使する垣地  
 福んごんが物ふ自由な形世帯  
 ころころあきまりと浅がりく  
 上りりしい楽なすをまきし海  
 めんごーいありめん美理かま  
 じしろろえん子娘あおとま  
 世とがくの物茶由山は浮ん  
 柳屋三ノ巻一  
 切り流り子孫尼天下の結をこま  
 横松 赤松 山姥 カチウ 志水 美人 山根 矢正 マイ  
 横松



此みやげのあはれびんのはなを  
お川く流すの人をよしと  
有や子綱より目ざり二三  
漢道く又大仏の學ぶせん  
統の目受をよくやと  
は姫子への糸で巾をおひ  
けいせいの小指でうごくふ  
七騎を返ハけあわの下り坂  
あじをまらぬ丸あんの洋かん

柳半三十九

井陣 一徳 錦鳥 志丸 有草 猿松 其成 杏雲 申風

海士いへるまでうづまるをばし  
羊ふらのこす船崎の十又  
卯ノ糸も小橋もまるは糸れ  
卯の糸も戻さぬ珠のつら  
け梅がさきこころ指をさし  
えぬハ雀た具ハ大を毛  
風名いへるがえりつるたを魚  
春の雲音ほの壁で何なるト  
あなハかり線房のハ朝目  
おあをさしがくはハキマ成り

里坊 百々 申風 三朝 鳥路 古名 亦来 猿松 花屋 志丸



かるい方がかきあやせぐくま  
 落葉の舟を浮き舟が幸  
 入夜のもたれ浮舟のこやう  
 笑や推お入その下まであつ  
 くらふ年のかきあ子名と帯  
 美い娘秋八娘のまじじい  
 大いそりのちのこはごり  
 懐でもおきそももるハ  
 市より小六十丁 道しんり

若松  
 尾右  
 杯子  
 女友  
 緒  
 秋夜  
 市風  
 本系  
 月経

市風 丁世三

十日又美交へまぶくふ種かり  
 あんまがちるとちを情二方のより  
 少返其子をかまきりけてあを号  
 名のまの傘一ぢちの坊をゆら  
 嶺よなるまがへんごて赤たんで  
 風の神せまうをなまう身がりん  
 函門まかあせもらうもまのうへ  
 ありちくハ二三河のねる極のま  
 神八年伝ハるのかしらん  
 西の日ハ下かきそふすこんや町

市風  
 全  
 里梅  
 庄系  
 公道  
 志丸  
 赤乐  
 有且  
 精松  
 柵系



神のつちやちかつたをうらな  
 とがなまーをうらなつたまのあ  
 あしたらのみやげの飯子た又子  
 そろ方でものまね相で曲り如縁  
 あつたあつたあやちりしそま  
 つへをつくらをよのまは子を  
 十月まめよ乃の子のほの子か  
 美の山酒をき子のせん均不  
 まあつたあつたあつたあつた  
 古鳥

神軍三世

孝好であることやうきをうら  
 いがまはなつてい酒客の道あ  
 組うちを呉屋権があしてんせ  
 あんなうへをあしていあつた  
 白酒ハ娘どがろく下サハ  
 ひらひら糖きしすことまあ  
 せんれいの呪ハ種まきさ書  
 川柳  
 御おあつたあつたあつた  
 古鳥

川柳



夷ハ姪秋ハ姪トの給仕ん  
 有ヤ子綱より目よりニ云  
 鯨の目也え子めくまや由り  
 うごくそが孔明母子不細を方  
 高者ハかり不のいをのハ新目  
 教政子高新ハ子ままやと出たづね  
 字流くとして志茶壺を唱る  
 今中かそふりとめられる一人若  
 五六宗えんせより倉大仁牌

期程  
 海島  
 有葉  
 夕火  
 花道  
 衿着  
 甚流  
 山姥  
 時道

解五十三卷五

翁を子孫おんのけそるを志云  
 坊すけを孫がられてつら四天王  
 斗町をのろくすくか女の医者  
 かぢけいも陽花ハ国のやう下ばん  
 七海島近ハげあうの下り板  
 朝かくり天言けれを脊くらくする  
 日つあすくのやうまたどんハ諸のり  
 うすくてか一とまれぬ歌の皮  
 ニッあさん斗及ハ終は孫利好ス

乐博  
 井博  
 乐乐  
 一極  
 本契  
 マイタ  
 楽来  
 山姥  
 矢云



赤くして又赤くするのまじり  
 赤がたまはる事かすもよし休  
 ぢうれいもまかぬてゐる所を  
 行跡でも遠でかかれぬ地か  
 ずる引く引ひて別れる三種  
 乳が一ツ赤子よすずるへ  
 笑をかけた母のやうにして  
 赤くして嫁あは下さゆる氣  
 井の尻尻尾のまきばさばさ

井陣  
 市風  
 岩橋  
 押寄  
 万巻  
 赤笑  
 マイ文  
 有麻  
 赤木

折は十二の九六

押入でかたり人斗りまいて  
 今直のりハ仲糸あよす  
 ついそんねあえ年のこのま  
 こねられて娘あいらを餅つ  
 葉のまきう四葉妹トお和よ  
 ろうちくも二三あいらだん  
 両五ちあふのかけだこ  
 十とちをのんハ中後ち  
 土子の床にうまがくして尾を

榎林  
 有幸  
 口  
 山橋  
 赤木  
 有且  
 加次  
 尾合  
 矢山



やすお花おこね近も足をぬき  
やハうと者よおらるべき十五  
医術よとりの又帰ふと名れ  
やわねるで中層くすありかつる  
後うんよ後家いおを十何せたる  
るのりるとお地え下せてくをき  
つごけある白蓮ていさるすじたる  
世間よとすう者らあを長母り  
よくハやの撥すくもを思ひあり

古多

振袖

尾合

全

山猿

八雲

木咲

柙雨

赤神

御世七



